

〔イエスは〕話し終わったとき、シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなさい」と言われた。シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょ」と答えた。そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。そこで、もう一そうの舟にいる仲間に合図して、来て手を貸してくれるように頼んだ。彼らは来て、二そうの舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになった。これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである。シモンの仲間、ゼバダイの子のヤコブもヨハネも同様だった。すると、イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。-ルカ5章-

私たちの召命

今日、主日のテーマは「召命」についてです。

召命とは、神がご自分の計画を実現するために、人を用いて「使命」を与えることです。神の計画とは、人類の救いであり、人が救われるためには、神を知らなければなりませんから、洗礼を受けた私たちが宣教者と言われるのは、すべての人が神を知って救われるための使命を受けているという意味なのです。

神の召命には、種々のパターンがあって、① 直接神から名指して呼ばれるケース。② 自覚はなくても、神が聖霊を与えてその人を方向づけるケースです。今日の「召命」は①のケースが語られます。神を前にした時、人は太陽に接近した一滴の水のように、一瞬の蒸発すなわち「死」を意味すると恐れました。イザヤの召命は、その恐れが回避され、畏れ多い歓びを与えられて、与えられた者が、与える者とされた体験でした。

一方、大魚の奇跡を目の当たりにして、人の子イエスに神の片りんを見た弟子たちと、片や、律法に仕えながら、その実体である神を知らないで、神を迫害していたパウロが、イエスの一方的な直撃を受けて宣教者にされたのも、同じ召命でした。

このように、神に出会った人は、人が変わります。ところが、出会ったと思っ込んでいる人も、人が変わります。しかし両者に命に関わる「いざと言う時」が来ると、その違いが明らかになります。**神に出会った人は、人を大切にしますが、そうでない人は、いざと言う時、自分を大切にします。**なぜなら、人は、聖霊から愛を戴かない限り、本性である自己保身、自己中心性から脱することはできないからです。神に出会う人とは、自分の無力さを知って自分を離れ、神に望みを置く人なのでしょう。無力な人、小さい人にこそ、神が自由に造り変えてくださることを望む、明け渡しの心があるからです。

こうして、神に変えられ、聖霊の使徒とされた私たち宣教者は、自分を伝えるのではなく、神と、人の救いとなる福音を人にもたらすのです。

